九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

彌生式土器論と北九州（一）：細線鋸歯絞鏡の新古

山本，博

https://doi.org/10.15017/2344447

出版情報：史淵. 4, pp.98-122, 1932-07-15. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

彌生式土器論と北九州（一）

――細線鋸歯紋鏡の新古――

山本博

一、繩紋・彌生式土器系統論の回顧
二、北九州の新資料とその展開
A、筑前御床新町の新資料とその特徴
B、筑前遠賀川の有紋土器と其の特徴
C、細線鋸歯紋鏡背紋と新古觀
三、結　論

一、繩紋・彌生式土器系統論の回顧

學界今日の考古學は對象のエクステンションに於いて實に素晴らしく廣範圍に亘つてゐるが、草創時代以降今尙學界に横臥する怪物の一つに繩紋土器と彌生式土器に對する諸問題が殘されてゐた。

大正時代の初期、彌生式土器に對する學界の認識は「彌生式土器と稱する一種特異の品を發見して大に新學者間の注意を喚起せることありし云々」（大正三年一月出版、八木奬三郎氏「日本考古學」中編1――8頁）の程度

を出でなかつたが、八木氏の慧眼なる、當時にあつて此の土器が貝塚土器に類似すると共に古墳土器にも類似しまた二者の何れにも入らざるものゝあることを既に看破唱導されてゐた。恐らく學者の關心は此の前後に勃然として擡頭したのであらう、斯かる氣運に乘じて現はれた多くの考究のうち、特に忘れ得ない貢獻を齎らしたのは京大教授濱田青陵博士であらう。即ち河内國國府の遺跡に對する層位學的研究から樹立された繩紋土器及び彌生式土器一元論にして、その高説は大正七年及び九年の京大報告に掲げられ、要約すれば「土器系統の原始繩紋土器より發して、アイヌ繩文土器及び彌生式土器を分岐せしこと」を提唱されたのであつた。右の二冊は不幸にして入手し難く、就いて見るの便を得なかつたから中谷治宇二郎氏の「日本石器時代提要」(524頁)に述べられた語を引用したのであるが、右の語に誤りなきや、及び濱田博士は今日尚右の見解に立たれつゝありやを確かむる爲め博士の高説を他に求めて見た。

昭和五年三月刊の「東亜考古學研究」は博士の論文集とも見るべく、幸にも此のうちに大正十年三月東京史學會大會にて講演された速記「考古學上より見たる九州の古代民族」が「史學雜誌」(32 3 4)に載せられ更にこれに集錄されてゐる(同書 607——633 頁)のみならず、一言河内國府の遺跡にも觸れられてゐた。即ち南九州拝宿に於ける繩紋土器彌生式土器の出土狀態が國府の出土狀態と酷似する事實より、博士の繩彌土器一元論は此處にも適用され、此れらの兩土器が「影の形に添ふ如く、常に同じ遺跡から出ると云ふことは不思議でありまして、是は寧ろ出來るならば此の上の土器(彌生式)と下の土器(繩紋)とは同じ人間が造つたものであつて、たゞ時代が違ふとしたらどうでせう。さう解釋した方が簡單に結論がつくと私は考へます。」(623 頁)そして「勿論下の繩紋式土器を

作つた人種が全然其の儘のもので、後の彌生式土器を作つたものではなく、多少新しい要素を加へ變つて來たかも知れませぬ。併し前者が後者の基本を作つて居つた人種であり、後者の主なる血液は前者であると私は考へ度いのであります。」（624 頁）と述べ、次に國府の遺跡に與へた既說を回顧され、「この河内でも彌生式土器と石器とが出まして、其の下に一種の繩紋土器が矢張り出て參りましたので、其の繩紋土器を私は「原始繩紋土器」と名づけ、それを造つた人種は恐らく彌生式土器を作つたと同じ人種であらう。さうして是を私は日本人の祖先の大本をなすもので「原日本人」と名付く可きものであらうと言つて置きました。」（625 頁）と述べられ、此の當時矢張り國府出土の人骨を精査された長谷部博士、松本博士が「此の石器時代の民族がアイヌ的のものであり、或はアイヌ的の要素が多い人種である」と言はれるに至り「私は此の點に於いて長谷部博士松本博士の說に降參」され、「私の所謂「原日本人」なるものは、アイヌ的の要素が多いものであると訂正致すのであります。但しそれが後の日本人の基礎をなした人種であると云ふ點に於いては、固より何等私の說を動かす必要はないのであります。」（626——627 頁）と、要するに國府の遺跡に始まる繩彌一元論は南九州にも適用され、兩土器の本源が「原始繩紋土器」なりとする既說を肯定され、その製作者を「原日本人」卽ちアイヌ的要素の多い日本人であると見られたのであつた。しかしながら博士の「東亞考古學」のどの頁にも、中谷氏が記された如き「原始繩紋土器より發して、アイヌ繩文土器及び彌生式土器を分岐」したとの確言はなく、ただ兩土器が同一人種に依つて作られたことを主張されてゐるが、それは何れであつても差支ない、何となれば博士と反對の立場に在る學者は繩紋土器と彌生式土器との製作者は異人種なりとするのであるから、明らかに一元と非一元論の對立を見得るか

らである。

昭和五年二月出版「東亞文明の黎明」は文字通り東亞の大局を語るものであり、博士は右の附錄「日本文明の黎明」(81頁以降)に於いても大體前說と同意見を示され、また「考古學上より見たる大和」(昭和五年十一月「奈良文化」19號34頁以下)にも同論旨が見られ、特に後者に於いては「原日本人」の系統について今一歩進んだ具體說を開陳され「繩紋土器石器時代の民族は、今日のアイヌ人に似た特質を多分に有して居つた古亞細亞人(Palæ Asiatic race)とも云ふ可きもので、後に加はつた新しいものは蒙古人的の要素が確かに其の主なるものゝ一であつたと」推測されてゐた。

「東京帝室博物館講演集」(第11冊、昭和六年十月)にも「埴輪に關する二三の考察」に博士の高說が見え、土器系統論には深く語られてゐないが、しかし繩紋土器に比較すれば彌生式土器は美術的價値に於いて一籌を輸するとしても、窯法は斷然勝れてゐると說かれ、その彌生式土器の窯法は「恐らくは朝鮮半島を通じて東漸した大陸文化の影響に本づくものであらうと想像するのであります。其の證據は矢張り此の彌生式土器が先づ九州に於いて現はれ、其の最も古いものを此等大陸に近接し、其の文化の影響を最も受け易い地方に於いて見られると云ふことなどを以ても分かると思ひます。」(56頁)と言はれてゐた。

河內國府より發した博士の繩彌一元論は北アジヤに系統を求めんとする「原日本人」と結合して、土器系統を二つとも北アジヤに求められたのであつた、そして「原始繩紋土器」とも言はれる程の古い土器が河內や南九州に見出されながら、博士自から彌生式土器の「最も古いもの」の存在を承認さるゝ北九州に「原始繩紋土器」の

出ないのを如何に解釋されてゐるかは明らかにし得なかつた。何となれば彌生式の源流を「朝鮮半島を通じて東漸した大陸文化」に求められた事實は、既に繩紋及び彌生の兩土器を「原日本人」の製作と認め、そしてそのうちの彌生式系統を朝鮮方面に指向される限り、繩紋の系統も亦當然朝鮮方面から求められねばならぬ、兩土器が「影の形に添ふ如く、常に同じ遺跡から出る」のが當然であるとすれば。

右に數へ擧げた濱田博士の近著近說には「原始繩紋土器」や「原日本人」論と相容れざる論旨なく、從つて、博士は今日尙右の見解の妥當なるを認められてゐると云ひ得るであらう。しかしながら「東亞文明の黎明」は其の附錄に於いて我が古代文化姿相と土器系統の大局に觸れられながら、如何なる理由か「原始繩紋土器」なる語は遂に一語もなく、また「奈良文化」に揭げられた「考古學上より見たる大和」は直接「原始繩紋土器」の語を案出された河內　府遺跡の文化的變遷を語られながら、此處でも一語の「原始繩紋土器」を見出し得ない、それでは濱田博士は「原始繩紋土器」の語、從つて、繩彌一元論を廢棄されたのであらうか。

「東亞文明の黎明」(91 頁以下)では、我が石器時代文明がアジヤ大陸より渡來したことを理論上推察され、その經路を求め「南の方臺灣の石器時代文化は支那大陸と聯絡して、琉球とは却つて繫がらず、琉球は又た九州よりも新しいので、此の方面の經路は考へられないのであります。朝鮮方面は何うかと申しまするとと、九州には彌生式土器も多いが、古い繩紋式土器文化の「サブストラツム」が確かに存在して居り、又た朝鮮に於いては彌生式土器文化との聯絡はあるが、未だ繩紋土器との聯絡は充分證明せられて居りませぬ。然らば北方樺太・千島の方面は何うかと申しまするとと、是れ亦た東北地方と共に繩紋土器文化の中でも新しい方のもののみが明かであつ

て、古いものが未だ注意せられて居ないのであります。」（91——92頁）しかしながら「日本の石器時代は北方アジヤと聯絡すべきものであらうと推察するを禁じ得ないのであります。」（92頁）と語られてゐる所から推察すれば、たとひ此の「東亞文明の黎明」に「原始繩紋土器」の語を見出し得なかつたとしても、尙繩紋、彌生の兩土器を同一系統と看做されそしてその源流を北アジヤに求めてゐられることは明らかであつた。

それでは、博士自からの言葉にも有る如く未だ一片の繩紋土器を見出さない朝鮮を通じて、我が繩紋彌生の兩系統を北アジヤに求めんとする大飛躍は許容されるものであらうか。博士のこの飛躍は「鳥居博士がシベリヤを旅行せられて、ハバロフスク博物館で、日本の繩紋土器と全く同じ破片を注意せられたことは頗る重要」（93頁）なりと言はれた點に在るらしく、未だ取消されざる「原始繩紋土器」の語も亦自から右の土器片に命脈を繋ぐかに考へられるが、これと殆んど好一對とも見らるゝ福岡市大濠の例に依れば、殆んど彌生式遺跡の巢窟とも見らるゝ北九州の廣汎な地的範圍の一點にあたる大濠から嘗て方五寸に足らぬ一片の繩紋土器の出土（「考古學雜誌」16の12中山平次郎博士報）したるを以て、未だ嘗て繩紋土器の出土なき朝鮮との聯絡を求めんとするは不合理なるに似た感を抱かされ、況んやシベリヤの繩紋土器が、他のものとの混同なることが明らかと成つた今日、博士の飛躍は暫らく保留さるべきではあるまいか。（「青丘學叢」第二號、藤田亮策先生報）

濱田博士の所論にして繩彌一元論に終始さるゝ限り、即ち繩紋を古く、彌生式を新しく考へらるゝ限り、東日本に遍在する繩紋と、西日本に分布する彌生式の事實に對し、東より西へ向つて人種移動が行はれたとする假說の存在を許容しなければならず、次に、繩紋の濃布する東日本が遂に彌生式を生じなかつた奇觀を如何に解釋す

べきやが求められなければならぬ。況んや樺太・千島のものが東北地方のものと共に繩紋土器のうちでも新しい時代に屬すると云はれる限り、其の解釋の尙苦しかるべきを察せしめる。中谷氏の著に見る如く、博士が矢張り「原始繩紋土器」より繩紋と彌生式とが分岐したと見られるならば、我が文化は國府又は揖宿附近より發して東西に分岐したことゝ成り、最も古いと云はれた北九州の彌生式は遂に南九州又は近畿より發して朝鮮に移つたことゝ成り、博士自からの反對結果を齎らすのではあるまいか。また若し、最初「原日本人」が繩紋土器を作り次に彌生式を作つたとすれば、何故今日兩土器の分布が西と東に明瞭に分立しなければならなかつたか。繩彌兩土器一元論のうち繩紋土器の源流をシベリヤの一片に繫けんとするの望みは最早や認め難く、從つて繩紋土器の系統は再び吟味の必要に迫られたのであつた。

或る意味に於いて濱田博士の一元論に對立して矢張り大正時代の初期より今日にかけて活躍されつゝある學者に中山平次郎博士があつた。中山先生の踏査範圍が主として北九州に在つたとは云へ、その地理的位置に立脚する考古學的成果は、以て我が古代文化姿相の主軸を語るに充分であつた。吾人は先生の高說を主として「考古學雜誌」に見得た外、常に謦咳に接して敎導を忝くするのみならず、更に最近は後に述ぶる遺物について最近說を拜聽するの光榮に浴し、特に濱田博士の一元論と先生の非一元論が如何なる局面に向ふかにつき、深き興味を抱けるものである。

筑前板付の遺跡は石器と金屬器を出し、嘗て中山先生をして石器時代と金屬器時代の遺跡重複說を提稱せしめたのであつたが、多くの他の同種遺跡に於いても亦同現象を呈示するに及び、先生の考察は一變し、遂に金石器

併用時代の提稱となり、學界の廣く認める所となつたのであつた。北九州に於ける一つの考古學的ローカル・カラーは銅鉾銅劍及び屢これに伴ふ合口甕であり、合口甕と呼ぶ大甕は小形の窯器と伴ふことも有つた。此れらの精査は先生に依つて開拓され、十數年の討究は各種の貢獻を齎らされたが、特に土器に於いては大甕と小形窯器の伴出、內外面又は外面に塗布された丹鐵、赤素燒、暗褐色又は黑色土器の存在のほか、形態に於いては簡單な外反り口緣や複雜な口緣の土器から、平底、丸底、糸切底等の土器、或は外面に刷毛目や簡單な裝飾の施されたもの等を認められ、石器に於いては打製や磨製の石斧、石鏃、石庖丁、石槍、石劍、石匙、石杵、石槌、石錘、凹石、紡錘車等、金屬器に於いては銅鉾銅劍のほか貨泉や鐵滓を見出され、かくて北九州の遺跡遺物は彌生式土器を中心として、或る時は直接に、あるときは間接に石器及び金屬器に交涉が有り、これと共に齋瓮土器との密接な關係にさへ注目されたのであつた。

北九州彌生式土器の精査は必然に繩紋土器への關心を喚んだ、そして今まで現はれて來なかつた先生の彌生式土器系統論は肥後の阿高及びその他の貝塚土器に關係して擡頭し、肥後の繩紋土器が東日本のそれと同種なる事實から、主として九州西部に於ける兩土器の分布を求められ、筑後南端の二川村の繩紋彌生混淆遺跡が九州西部に於ける繩紋土器分布の北端らしきを確かめ、兩土器を以て別系統なりと考察され、その結果は「貝塚土器と彌生式土器との古さに就て」(「考古學雜誌」8の6)と「貝塚土器の席紋と其類似紋」(同、8の12)及び「近畿繩紋土器・關東彌生式土器・向ヶ岡貝塚の土器竝に所謂諸磯式土器に就て」(同、19の11、20の2及び4)と成つて現はれ、身は北九州に在りながら、其の一言一句は廣く日本の主要遺跡遺物に及ぼされ、所詮九州の繩紋と

東日本の繩紋は「親子關係といはんよりは兄弟關係或は從兄弟關係」(19の11)なりとしてこれを彌生式より峻別され、そして恰も石器時代の彌生式が比較的古く取扱はれてゐたに對して金石併用時代の存在を確認せしめて彌生式の年代降下を提稱された如く、或る種の繩紋土器も亦その實用年代の降下を提稱されたのであつた。即ち嘗て濱田博士が國府や揖宿遺跡に於いて見出された或る種の繩紋土器を原始繩紋土器として極めて古く取扱はれんとしたのに反し、中山先生は却つてこれを新しく見んとされ、結果に於いて全く相反する立場をとられたのであつた。先生の着眼點は斯の種の遺跡に於ける兩土器の併存であつて、若し繩紋土器が事實上彌生式より古きものならば、當然多くの石器を伴ふべきなるにも拘はらず、石器の數の少き上に、屢齋瓮をさへ伴ふと云ふ點であつた。特に齋瓮への注目は關心に値し、未だ我國に於ける齋瓮使用の上限年代の明らかならざる時に當り、九州彌生式遺跡に於ては右の事實に反して極めて多くの石器を伴出し、鉾劍と必然關係ありし大形の合口瓮に未だ嘗て齋瓮製の見出されざるは、齋瓮の使用案外新しきに非ずやと考へしめ、新しく思はるる齋瓮が濱田博士の古く考へらる繩國府等から出土するは、むしろそれらの遺跡の新しきを證するならんとされた所に在つた。

濱田博士が繩彌兩土器の源流を北アジヤに求められたに反し中山先生は彌生式を以て朝鮮に、繩紋土器を以て論文の隨所に南方系を示され、南九州と關東奥羽方面の繩紋を連絡する文化移動線を海流に囑し、而して疑似繩紋土器の類は繩紋彌生兩文化の接觸より生じたる文化の交聯と見て年代を新しく推定されてゐるのであつた。是等の綜合的研究とも云ふべき近說は「太宰府附近に於ける彌生式系統遺跡調査」の長論文、殊にその一項「彌生式に關して」(20の11)であり、十數年に亘る長き實査に於いて、先生が取扱はれた北九州遺物の特徴を一言にし

て云へば、實に「つまらない」と稱さるゝ簡單無紋の彌生式土器が大部分であつた。即ち北九州の彌生式土器は無紋無飾を常態とし、有紋の如きは稀中の稀に屬し、たとひ裝飾ありとするも口緣部に打痕の點帶をとゞむるか腹部に刷毛目を示すに過ぎず、いまだ繩紋土器の如き美術的觀賞に値するほどのものはなかつた。

二、北九州の新資料と其の展開

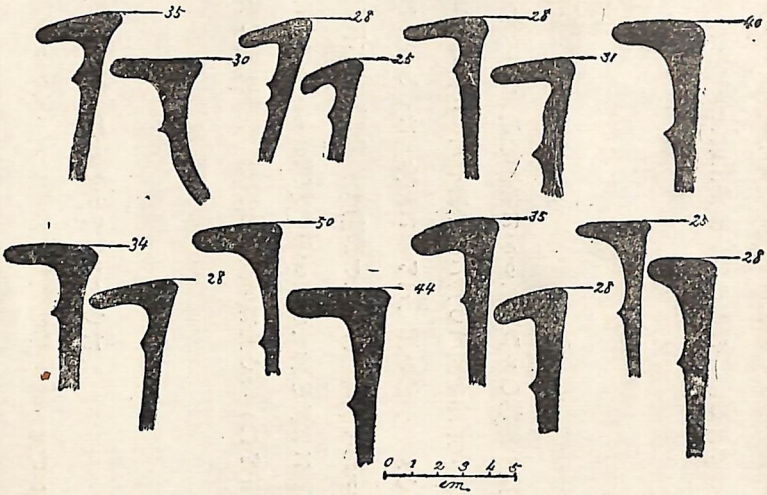
斯かる事實の北九州から今回九州考古學會員名和羊一郎氏に依つて一遺跡の發見が報道され、「つまらない」北九州土器に異彩を投じて從來の彌生式土器に對する見方を一變せしめんとする情勢を捲き起し、其の此れに對する中山先生の研究は、現今まで行きづまりに放棄されてゐた諸問題に一脈の暗示を提出し、先生の言葉を借りて云へば「行くとして通ぜざるなき解決鍵」が與へられるに至つたのであつた。此處に於いて、最も根本と成つた北九州彌生式土器の總覽とその再吟味を必要とし、吾人は、今日まで主として中山先生に依つて調査發表されてゐた北九州に普遍する土器形式を筑前糸島郡小富士村御床松原と芥屋村新町の遺物にとり、其れらの特徴を顧み而る後に新に問題と成つた遠賀式土器を擧げるであらう。

A、筑前御床新町の新資料とその特徴

小富士村御床及び芥屋村新町の地理的位置と地貌の特徴は中山先生が既に再三報道されてゐた。此の地をして有名ならしめたのは云ふまでもなく「貨泉」の出土であつた。貨泉に對する一部の取汰沙は先生に對する敬意を

（部緣口器土の町新床御前筑　圖一第）

（部緣口器土の町新床御前筑　圖二第）



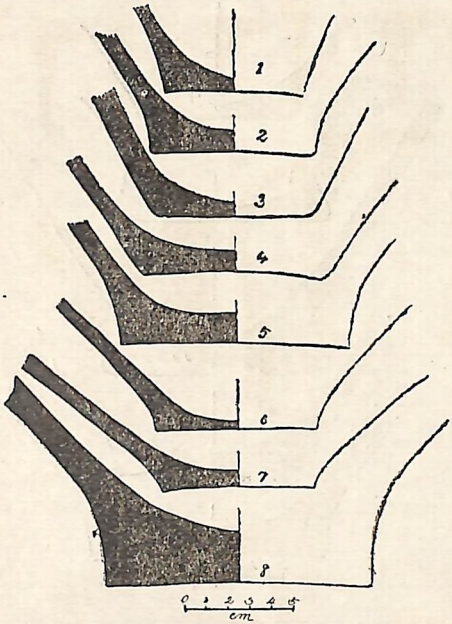
失するは勿論、本遺跡の特徴を理解しない所に在るが、試みに近代の遺物を求めんとして此處に赴くならば恐らく何ものも得られないであらうほど古代に繁榮して近代に忘れられた遺跡であつた。其處に見出さるゝ遺物は北九州の彌生式土器を代表さすに充分な數量と變化を持ち、加之、各種の石器を交へて可なり廣い地域に分布し、包含散列してゐた。

第一、二圖は御床及び新町出土の土器口緣部を示す。(口緣部の數字は口緣部の外徑を表はす。)

御床新町の土器に現はれた特徴は赭色の實に勝れたる點と時折丹鐵を内外面又は外面全體に塗布したる點と、そして口緣部の斷面圖にて知る如く著しく加工の跡を殘しながら、腹部又は肩部に時折突出帶を見るのほか何らの裝飾意識を發揮してゐない點に在る。即ち特に加工裝飾された部分は口緣部の變化と突出帶と一部の打痕帶は見るが、此れに有紋の裝飾は殆んどなく、しかるに、土器の繁法は彌生式として純系を保持しつゝその極點に達したとも云ふべく、赭色土器が主體を成し、暗褐色、黑色のものは

第三圖

御床新町土器底部

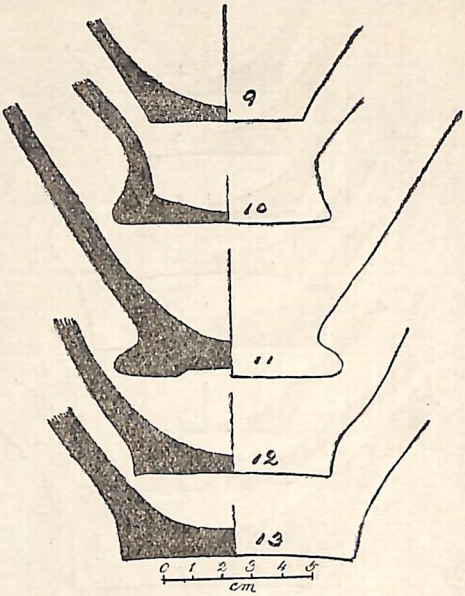


極めて尠い。第二圖に於いては肩部に小凸帶の在るものを示したが、吾人は此の遺跡に於いて未だ凹帶の周匝されたものを見なかつた。口緣部の形は一見鳶口型に近く、或るものは中山先生の所謂鍬型を示してゐる。

御床新町の土器は右の如く鳶口型又は鍬型口緣部の特徴と丹塗（吾人の見た一土器は成形後磨きをかけ未だ丹塗りのなきものが有つた、從つて或る土器は磨き上げた後に丹鐵を塗布したのも有る筈）の特徴を持ち、而も未だ此の丹鐵を利用して繪畫の如きを表現したものはなかつた。

第四圖

御床新町土器底部



腹部の特徴は「つまらない」北九州土器の代表と見るべく、何等紋樣と云ひ得るものは見當らない、稀に打痕點帶をめぐらせるものは有るかもしれないが、不幸にして採集し得なかつた。第三、四圖は底部を示す。殆んど總てが平底たる點留意すべく、ただ第四圖の11に於いて中央の凹める鉢形を見るに過ぎない。斯かる底部が第一、二圖に連續するを想ふなら御床新町の彌生式が、如何に平凡に終るかを考へしむると共に、此れが色彩に於いて

異るとしても北九州通有の形式たるに於いて「つまらない」のも極めて當然であると云はねばならぬ。無紋を通有とする北九州土器では、遺跡の一片の土器に強い關心は惹かれない、むしろ燒成、口緣部、底部等に幾多の變化を求めんとするは、止むを得ない傾向であらう。

第五圖に示した石器類は屢右の「つまらない」彌生式土器に伴ふものであるが、

イ、磨製石斧（玄武岩）

ロ、磨製石斧（玄武岩）

ハ、石庖丁（安山岩）

ニ、打製石鏃（安山岩）

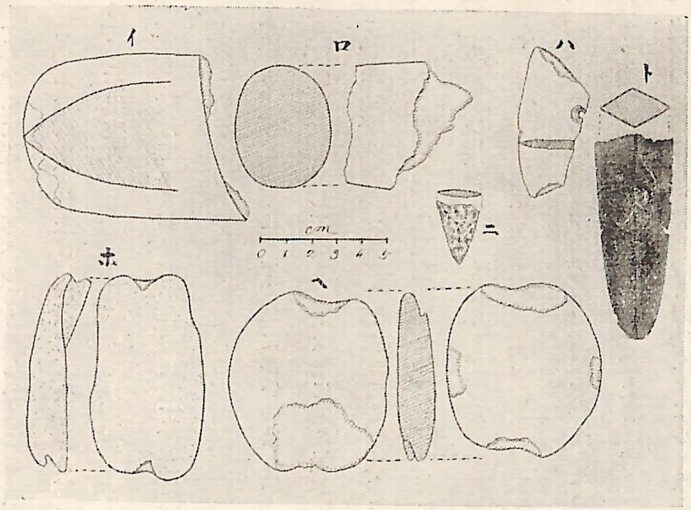
ホ、石錘（花崗岩質）

ヘ、石錘（花崗岩質）

ト、石槍（安山岩、或は頁岩と稱ずるものか）

右のうちイは打敲きと仕上げに於いて、糸島郡今山のものと小異し、むしろ最近中山先生より教示された所に從へば今津の石斧に類し、微細な仕上げは粗放な今山を放れ、此の綿密な打敲に依つて研磨に替へた邊

（第五圖　御床新町の石器類）



り、極めて今津製に近きを考へしめる。しかるに口は石質に於いてイと異る所なきに拘はらず大きさに於いて趣を異にするのみならず、仕上げに於いても全く異る點を認め、面を美麗に研磨して著しく光澤有らしめんとした痕を見ることが出來る。

ハは石庖丁の破片であるが蛤形の外刄にして貫孔に當つて周圍を損傷せしめた痕歴然たるものが有り、ニはトと共に平光吾一博士より戴いたものであるが打製無莖の石鏃、ホとヘは自然の河原石を利用して二ヶ所以上の打缺を與へて作り下げた石錘にして、特に多いのはへの餅型であつた。蒐集し得た數總計十二箇、何れも堅質の花崗製白色又は乳白色を呈してゐる。トは稀に見る鋭利な石槍破片にして、「太刀洗飛行場發見の石劍」（「考古學雜誌」11の7、中山平次郎博士報）と類似するも、大きさ（幅、長）に於いて遙かに小さく、共通する點は石質と色澤と鋭さであつた。（石劍は現在福岡高等學校藏）若し大きさを度外視して太刀洗發見石劍に想到すれば、此れも亦石劍なりと云ひ得べきが如くなるも、吾人は糸島地方に見らるゝ石劍と著しく趣を異にするの點より矢張り石槍ならんと考へる。

要之、御床新町の遺跡は中山先生の貨泉を伴へる外、鐵滓も伴出し、同時に右述の石器を出土し、先生の金石併用時代を立證する一證跡であり、彌生式土器は敢て右の如き小形中形の甕器にとゞまらず、屢大甕の破片を出土する。出土の土器にして完形のもの殆んどなしと雖も、底部に現はれた特徴より推せば、土器の吸水性比較的小なる事實と相俟ち、底下部の外角が殆んど完全なる遺跡の砂地たるにも關係するが、窯法の極めて進歩せるを推察せしめる。御床新町の土器は、他の地方に見出さる大形の合口甕と燒成上に大差なきものゝ如く外面裝飾に於い

ても斷面に酷似共通する事實は否定し難い、そして此の形式で「つまらない」彌生式を代表するものであつた。

B、筑前遠賀川の有紋土器と其の特徴

名和氏に依つて發見報告された遠賀郡水卷村字立屋敷八劍神社下の遺物は、今や中山先生に依つて開眼されて新土器論の提梅となり、正に考古學發見史上の一エポック・メーキングたるを失はない。從來の北九州彌生式土器は吾人が右に御床新町の遺物を以て代表せしめんとしたものに類し、未だ有紋土器を豐富に出土する遺跡を求めることは出來なかつた。從つて色々な意味に於いて古代文化の究明に支障を呈示してゐた諸問題が、今や再吟味を要求しつゝ新しい解決道に進むと共に、北九州に於いて彌生式土器に二つの系統有りと云ふ新說が中山先生に依つて今回初めて提稱され、その外廓は過日九州考古學會席上に於いて發表されたのであつた。

遺跡は遠賀川畔八劍神社横の堤防を西南の河床へ下り、約一丁にして稍小高くなつた砂丘に至る。此處が現在知り得た最も濃密な散布地であると共に包含層を成す。しかしながら遺物は神社より點在し、それより上流約三丁に亘る廣き範圍に分布し、幅約二十間に達する。遺物存在狀態は組織的發掘を俟たねば明言し得ないが、本年はじめ京城帝大の藤田亮策先生と有光敎一氏の御來福の砌、中山先生と共に此の遺跡に御案內し、藤田先生が一部を發掘された所に依ると、深さ約四十サンチ前後に於いて數位の遺物包含層を認め得た。朝鮮に於ける斯かる遺跡を精査された藤田先生の高說に從へば、此れらの狀態は、夫々の時代層を示すものではなく、幾回となく洪水を蒙つて構成された地貌を持つと云ふことであつた。遺跡地が現在兩堤防に挾まれた河床に在ること、川流が

遺跡の一端を洗ひつゝ北流せる姿は、遺物散布の狀態及び遺物表面の磨滅せる事實と相俟ち、正に然るべきを察せしめる。

此の遺跡出土遺物にして吾人の知り得たものは概ね次の如き物であつた。

1、彌生式土器――有紋、無紋。

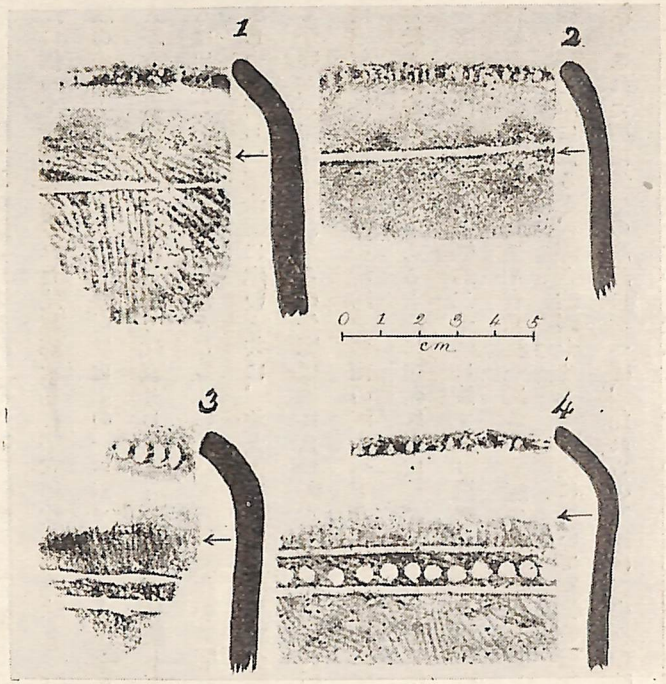
2、土製曲玉

3、石器――打製石鏃、磨製石鏃

磨製石庖丁。

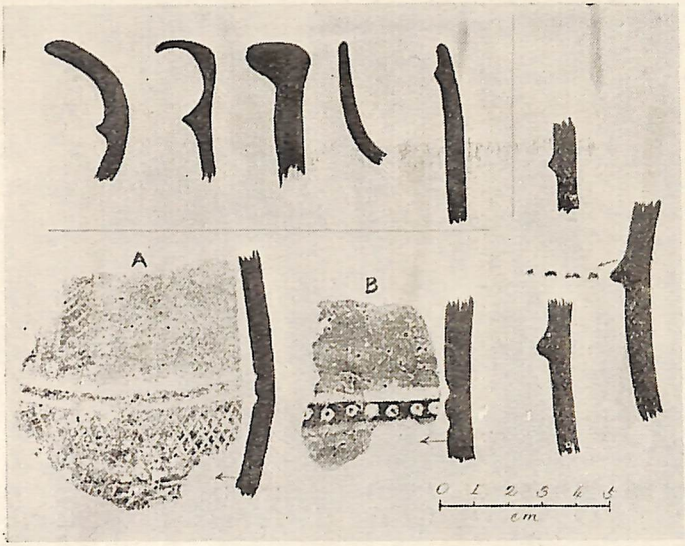
以上の遺物に關連して附言すべきは北九州の各遺跡に於いて屢彌生式土器に伴ふ齋瓮土器が未だ一破片も見出されなかつたこと（尤も、彌生式にして或は此れが齋瓮かと思はるゝほどの硬度と色調を持てる破片は僅少ながら採集し得たが、他の地方に遍在する齋瓮に比すれば色稍黑く、質贏弱なるを免れ難く、むしろ燒成に當つて出來上つた別種の彌生式かに考へられた。）

第六圖　遠賀川土器口緣部と紋樣



及び石斧も未だ見出されてゐないこと、更に遺跡地は砂地にして處々に川葦の繁れるを見るが、鐵分を包含し、鐵滓も屢遺物と伴出することを附言する。

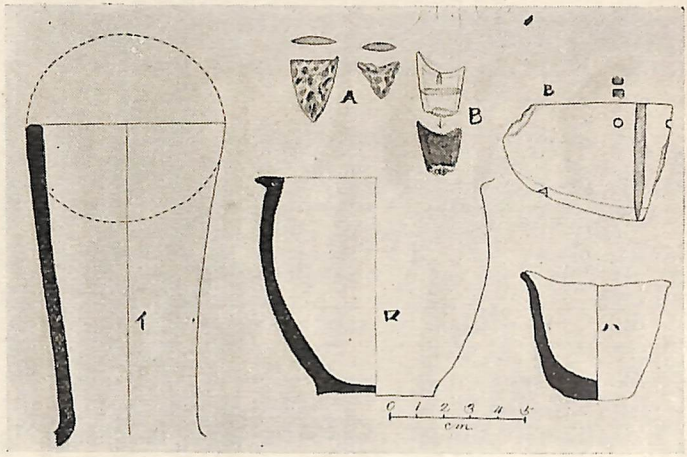
（第七圖　遠賀川土器口緣部腹部と紋様）



既に第一、二圖に掲げた北九州通有の土器口緣部は鳶口型又は鍬型を呈するに反し、遠賀式土器は第六圖及び第七圖に見る如く口緣部の彎曲極めて緩にして平假名の「く」字型を成し、稀に第一、二圖と共通するものを見る。

遠賀式の殆んど全般を支配する口緣部は、右の如く「く」型斷面にして、中山先生はこれを「S」字型と呼ばれてゐた。何れにしても其の彎曲は他の土器の如く決して角張つたものでなく、流暢な「S」字型、「く」字型を成し、而して遠賀式土器全體に通ずる燒成を見るに、有紋、無紋の兩者を通じて暗褐色を大部分とし、黑味を帶ぶるを原則とす。一見羸弱の如くなれども、硬度比較的高く吸水性に於いても決して大とは云ひ難く、むしろ

（第八圖　遠賀川土器石庖丁石鏃）



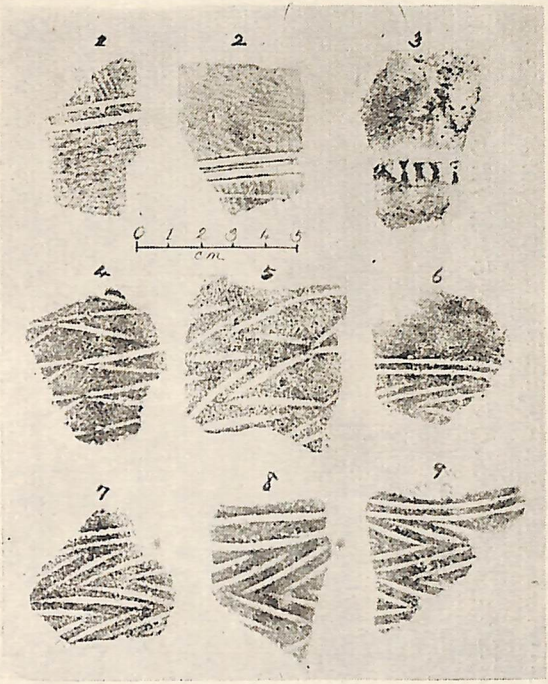
御床新町式より小なるもの多きは、窯法に於いて御床新町式に劣らざるを想はしめる。しかしながら、御床新町式は大形小形窯器を通じて燒成美麗なる點に於いて彌生式の本領なるが如く、此の點遠賀式は繩紋土器の如き色調と燒成に近く、さりとて、屢の水害を蒙りながら猶口緣部の如きは良く存されてゐたのであつた。

斯くの如く、遠賀式土器は堅固な燒成と流暢な「く」字型口緣部を持つと共に、厚さ〇・五乃至〇・八サンチを普通とし、むしろ薄手と稱すべく、ロクロの使用せるもの未だこれを見得なかつた。第八圖のイは土器臺と見るべく、各部の厚さ區々にして圖示せるは最も厚き部分、即ち〇・五乃至〇・七サンチに當る。口形不整圓形にして筒形を成し下部に至つて細く下端に於いて左右開きたるを察せしめる。此の土器にして中山先生言はれた如く、果して土器臺ならば、その形狀は正に北九州の一異例と稱すべく、普通見る所の形は、鼓形に似て上下に開き中央に狹く成れるも此れに至つては形も小さく、筒形を呈してゐた。ロとハの二つは知り得た稍完形の小壺形土器にして、ハはその

上に圖示せる石庖丁と共に藤田先生の採集に係り朝鮮へ持ち歸へられたものであつた。ロとハは共に手揑にして暗褐色の堅固な燒成である。

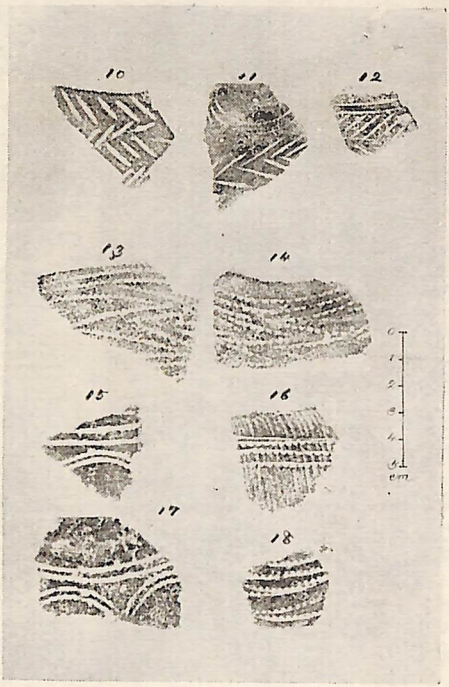
遠賀川畔出土遺物のうち特に中山先生の眼にふれ、最も新しき提案の根本と成つたものは、即ち右述の特徴を備へた有紋土器の存在であつた。有紋土器と無紋土器の比例は、決して明確に云ひ得ないが約十對一、又は二十對一位ひにして、少し注意すれば有紋の破片を採集するに困難ではない。此の事實は、無紋を以て本領とする北九州遺蹟と全く相反する。

（第九圖　遠賀川有紋土器）



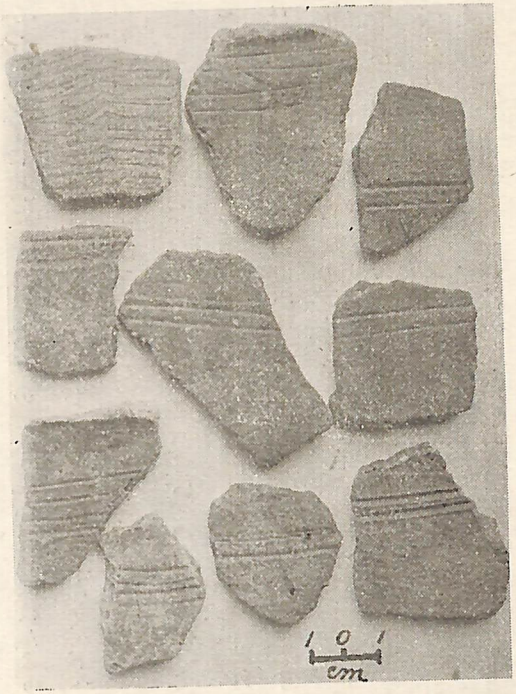
第九、十圖に掲げた拓影と、既に示した第六、七圖は遠賀式有紋の一半を語るに足るものであつて、第十一、十二圖の寫眞と對照し、此れらが大部分土器の口緣部、肩部、又は腹部に施されたることを知る。此等の有紋のうち最も簡單なものは第六七、十一圖に示した一條乃至四條の凹帶を肩部にめぐらしたもの、又は腹部に小突起帶を廻らしたものであ

（第十圖　遠賀川有紋土器）

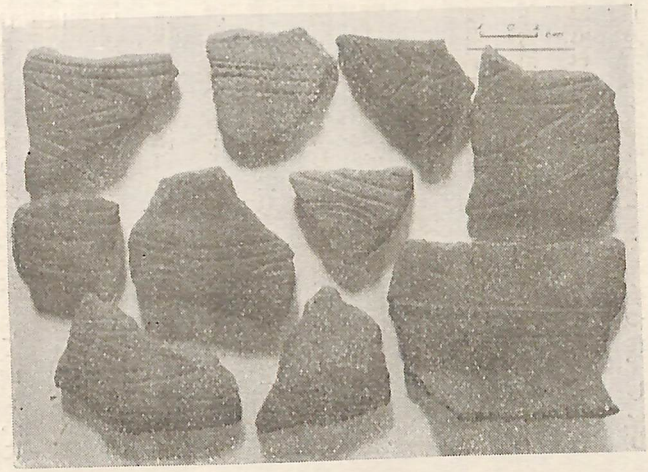


つた。殊に多數を占むるは第十一圖の如き凹帶の存在にして、此の事實は北九州一般が肩又は腹部に突起帶をめぐらせるのと對立すると云ふべく、窯器の大小を暫らく措くとすれば、遠賀式土器の帶はむしろ凹帶なりと云ふも過言に非ざるを考ふ。「つまらない」土器と考へられて來た北九州の東部に、新に見出された有紋土器は、單に北九州彌生式に一異彩を投じたと云ふにとゞまらずして、此の新事實を如何に解釋すべきやが新に課せられた問題と成つたのである。中山先生の關心が異常に集中され、その結果彌生式に二つの系統有りと斷案さるゝに到るや、我國土器論の回顧は決して無意義に非ざるべく、大正時代初期、問題を學術的ならしめた彌生式土器即ち中山先生の「狹義の彌生式」及びこれと同系の土器と、そして疑似繩紋土器の一類は將に再吟味の必要を覺へしめ、同時に遠賀式有紋土器紋樣の暗示に、尠からぬ意義を見出さねばならぬであらう。

第六圖の1は口緣部外邊に沈點帶の痕跡をとゞめ、その下に一條の沈線凹帶と刷毛目を示し、斯かる土器は2及び3と共に可なり出土し、沈線帶の代りに第七圖の如き突出帶の存在するものあれども其の數決して前者の比



（第十一圖　遠賀川有紋土器片）



（第十二圖　遠賀川有紋土器片）

ではない。

第六圖の4は第七圖のBと類似した圓形沈點帶の存在なれども4の圓形は尖端の平らかなもの、Bは竹の如きものを以て施したと見られ、第七圖のAは中央に二條の凹帶を施して一條の凸帶を作り、其の上に縱に沈線二條を施し左右（左側は明瞭を缺くも下端に名殘をとゞむ）に羽狀の沈紋を與へてゐる。下部を見るに、此處には斜に格子紋（又は網

目紋）の一帶を施し、その下へ更に稍右に傾いた斜行櫛齒紋を二條の沈帶のうちに入れたのを見る。即ち此の破片には二條縱線の左右に羽狀紋を與へたる部と、格子紋帶と、斜行櫛齒紋帶の三つの模樣が集中されてゐた。

第九及び十圖の4、5、6、7、8、9、10、11、12、及び13、14はその筆法より見て同一なること明らかにして、特に5、7、9、10に於いては中央の介線を缺ける羽狀紋（又は横倒八字重疊紋）の組合せを見るべく、或るものは上下二段とも同方向に進み、或ものは上と下とが反對方向に進み、5の如きは上下二段が同方向に向ひつゝ一ケ所に於て桝型を呈し、10の如きは羽狀紋と云はんより、寧ろ櫛齒紋の亂れたる四帶が見られ、此の施紋は左上より右下への二帶を先に施し、而る後に右上より左下への二帶を與へたりと見るべく、後者の極めて窮屈に成れるはこれを立證するに足るであらう。此の亂れは16や18の亂れの如く、往々にして施紋法或は施紋器の形を暗示し、貴重な手がかりと成ることが多い。13、14は右の紋樣を櫛目にて表現したに過ぎないが、15、17に至つては二條の櫛目沈帶の下に二條同心圓櫛目を呈示する。此れらの櫛目紋は一側を平らかに、他側に凹凸を作れる部に特徴を示し、12のみは二條沈線の下に完全な羽狀紋を施してゐる。

以上を綜合するに、第九、十圖に於いては二條の平行沈線又は同心圓の下に羽狀紋或は中央介線を缺ける羽狀紋及び二條櫛目同心圓を表現してゐた。即ち前述の三つの紋樣と通じて合計六種以上の紋樣を認め得たのであるが、是れらの特徴を以て既述の御床新町式に比較して如何なる相違が見られるであらうか。

簡單に云へば、無紋土器と有紋土器の對立である。もとより遠賀式にも丹鐵を塗布せるものが有つた、しかしながらその塗布された跡を見れば決して御床新町式の洗練されたものと比すべくもなく、即ち燒成そのものゝ性

質に依るとは一應は考へ得るが、むしろ丹塗りそのものゝ趣味よりは器具を用ひて紋様を土器に附與する方にその天分が現はれてゐる。

遠賀式土器に伴出した土製曲玉は、(藤田先生の採集に係り其の時筆記して置かなつたので形を示し得ないのを遺憾とする)赭色に稍褐色を帶び、直角形に曲り、頭尾共その太さに大差なく、直角の曲り目が稍太く成り、全長約八サンチ位であつたと記憶する。而して頭部と思はるゝ所に一箇の貫通せる孔が存し、曲玉各部の斷面は圓形であつた。吾人の寡聞なる、北九州に於ける土製曲玉の出土は嘗て中山先生の報告された筑前春日の一例と、田川郡關の山洞窟出土の一例と合して三例あるに過ぎない。春日例はむしろ硬玉に近き彎曲を示し、頭部稍細く成れるも、遠賀川出土は關の山例と殆んど共通の直角にして、關の山例は稍細く小なるの相異を見る。

伴出打製石鏃はこゝに示したものゝ外に宗像高女田中幸夫氏、名和羊一郎氏の發見を合して約二十箇、そのうち數箇の黑曜石を含むも、大部分は安山岩製の無茎に屬し、第八圖のA二箇のうち右側のものは極めて小型の情巧品にして表裏共打缺を與へ、左側の大型は表面全部と裏面は刄部のみ打缺けるに過ぎず。Bは磨製石鏃にして田中氏も一箇採集されたと聞く。逆刺の兩端長さ等しからざれ共、表裏より刄をつけ所謂蛤刄を成し、石質粘板岩なる點は石庖丁と同類であり、石庖丁は此處に圖示した以外に、田中、名和兩氏は尙六箇採集され、その數意外に多い。しかし特に注目すべきは此處に示した藤田先生採集の石庖丁にして、二孔を有し、半缺の一孔は此の孔が金屬を用ふるに非ざれば到底貫き得ない鋭さを示すの外、穿孔に當つて屢生ずることある孔の周圍に、殆んど瑕疵孔を殘さない點であつた。

既述の如く本遺跡には鐵滓存在し、たとひ未だ金屬器の出土を見ずとはいへ、石庖丁が明らかに金屬使用の痕跡を示す以上、此れらの遺物は金石併用時代に直接又は間接に關係ありたりと見るに差支なく、中山先生は右とは別箇の御考察から、當遺跡が金石併用時代に屬することを語られたが、吾人も亦その然るべきを察したのであつた。

要之、御床新町式、從つて又北九州一般に通有な「つまらない」彌生式土器分布の東部に、右の如き新事實の發見されたことは、單に發見されたまゝで終るべき問題でなく、考古學上これらを如何に解釋すべきか、文化史上の地位についても一考さるべく、當然の結果として、古代文化姿相闡明の一助たり、たらねばならぬ。熟知の如く北九州の石器土器は同時に銅鉾銅劍を伴出し、鉾劍は或る地方に於いて或る種の鏡と或る種の銅鐸と共存したことを示してゐた。此の事實に注目されてゐた中山先生は、更に進んでそれらの青銅器に屢見得る紋樣を想起し、遠賀式有紋が、遂にこれと關係あるに非ずやの留意より、今回一つの成案を得られたのであつた。吾人も亦平常先生の垂教を忝ふし、各方面に啓蒙さるゝ所有つたが、豫てより細線鋸齒紋鏡に興味を抱き、各部の特徴を熟視してゐた折柄、今回先生の暗示に導かれ、驥尾に附して遠賀式との關係を顧み、兩者の間に深き有機的關係あるを力説したいと思ふ。(未完)